

Title	“授業改善を推進する学びの構造認識”教育のイノベーションに関する一考察(13)
Author(s)	小粥, 幹夫
Citation	年次学術大会講演要旨集, 40: 164-167
Issue Date	2025-11-08
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	https://hdl.handle.net/10119/20187
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

“授業改善を推進する学びの構造認識” 教育のイノベーションに関する一考察 (13)

小粥 幹夫 (ひとつなぎの会) 1834

＜概要＞ 10年に1度の次の指導要領改訂に向けて、現場の先生の理解を助ける学びの構造、学びに向かう力の内容と評価についての議論が始まっている。何を学ぶ以上に主体的・対話的で深い学びに向かう力により、未来に備えた資質能力の育成を目指し、学びの構造化が図られている。しかし、これまでの説明は、現場の先生にとって分かり易いとは言えず、知識と思考の関係の構造化を試みた。

キーワード：教育イノベーション、学びの構造、現場の先生、授業改善、知識と思考

1. まえがき

10年に1度の指導要領改訂に向けて、現場の先生の理解を助ける学びの構造、学びに向かう力の内容と評価についての議論が始まっている。何を学ぶ以上に主体的・対話的で深い学びに向かう力により、未来に備えた資質能力の育成を目指し、複雑な議論の理解を助ける構造化が図られている構造が必要である。しかし、知識と思考の関係の説明は、現場の先生にとって分かり易いとは言えない。中核的な概念、見方・考え方を知識と思考の関係を中心に考察した。

2. 学習指導要領次期改訂の審議と課題

2025年9月25日、12回の委員会の議論を経た論点が整理され、今後1年を目安に教科ごとの部会と総則・評価特別部会で深掘した議論を行い、2028年初頭の答申が予定されている。論点整理には今回の審議における基本方針が第1章において以下のように示されている。

＜三つの方向性＞ 主体的に学び続け、他者と協働、人生を舵取り、民主的な社会の創り手を「みんな」で育むため、以下の3項目を一体で改善する。

- ①「主体的・対話的で深い学び」の実装 (Excellence)
- ②多様性の包摂 (Equity)
- ③実現可能性の確保 (Feasibility)

ゴール①に関連して、「構造化・表形式化・デジタル化、学びに向かう力、人間性等の重要概念の整理等により、“分かりやすく、使いやすい学習指導要領”の実現」について本稿で分析する。すべての子供を対象とする①+②の理念は高く評価されているが、③の実現は容易でない。

次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方 補足イメージ①-1
～あらゆる方策を活用し、三位一体で具現化～

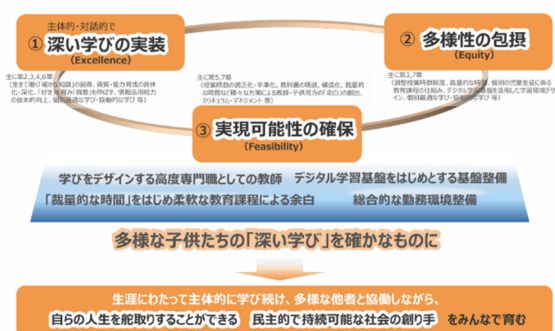


図1 次期学習指導要領検討基盤

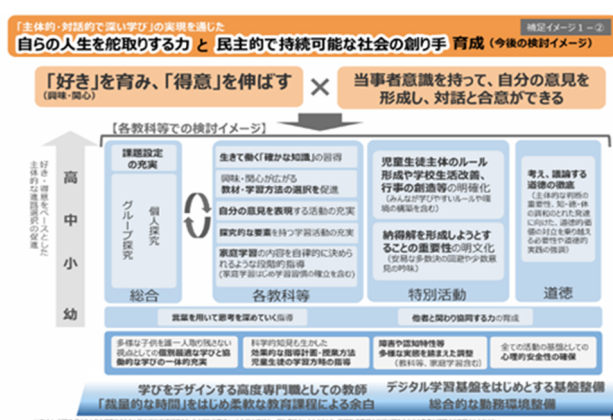


図2 論点整理の基本理念

【資料1】教育課程企画特別部会 論点整理 (案) https://www.mext.go.jp/content/20250919-mxt-kyoiku-000044946_03.pdf

3. 「主体的・対話的で深い学び」の構造化？

第2章では「構造化・表形式化・デジタル化、学びに向かう力、人間性等の重要概念の整理等」によって「質の高い、深い学びを実現し、**分かりやすく使いやすい学習指導要領**」を実現、「授業改善を通じた資質・能力の育成」を目指す事を述べている。

構造化は急速な技術進歩で予測困難な時代を生き抜く力の必要性から、知識以上に思考を重視、学びを支える資質能力の育成を打ち出した前回の答申において、指導要領の理解を助けるべく工夫された。この中で教科を学ぶ意義が「見方・考え方」として打ち出され、「主体的・対話的で深い学び」を通して浸透を図った。

今回の見直しでは、知識と思考の**深まりと広がり**をタテとヨコの構造で捉えて一体形成する提案をしている。さらに**学びの成果と意義**を「中核的な概念の習得、課題解決に活用する力を育成」と捉え、後者を「見方・考え方」とする構造が提案されている。

しかし、中核的な概念、習得とは何であるかの明解な説明はない。随所に教育基本法の学びに関する習得、活用、探究などの用語を用いて一貫性を打ち出そうとしているが、授業改善に繋がるヒントになるか疑問である。今後教科毎のWGグループでどのように解釈、分かりやすい実例を示し、特別部会において明解な説明がされることに期待しながら、次章以下では私の視点から検討を加えてみた。

<私の視点>

- ・知識の中核的な概念として習得とは？（今後の教科別WGで具体化） 具体的な授業改善？
- ・今回は教科ごとの見方考え方、教科横断の繋がり構造化から探究強化！ 今回は教科と社会の接続？知識と思考から！

4. 知識と思考

前回の改訂論議では、**知識と思考の深まりと広がりの中で、教科間のヨコの繋がりの一体化、構造化が強調され、総合的な探究の時間が設置された。**

今回、知識と思考は図4のように2本の柱として、拡大するタテと相互関係のヨコの中の構造の中で、知識をタテにつなぐことで達する**中核的な概念**が示された。習得した個別知識の積み上げをいうことは簡単であるが、方策のイメージが湧かない。

またこの間の思考の役割も明確でない。この課題解決には知識と思考の関係を整理が必要である。

<Q1. 知識は与えられるものであるか？それとも思考によって形成されるものか？>

知識の（中核的な）概念としての習得との表現を見る限り前者と考えられるが、中核的な概念は学び手が思考して個別の知識を集大成して**形成**するものではないだろうか？

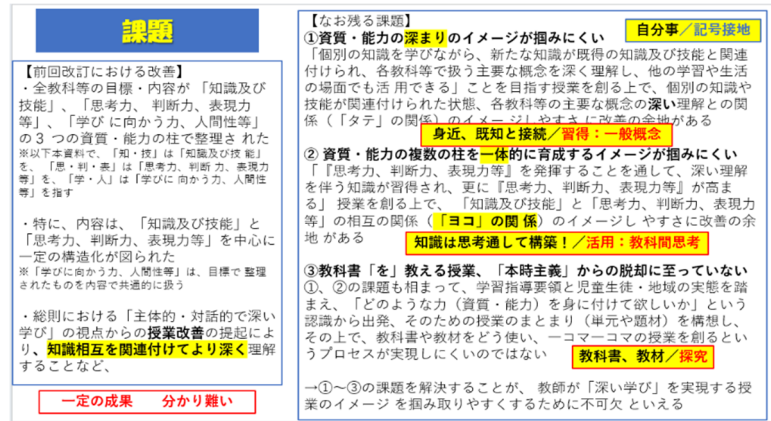


図3 資質能力育成の課題

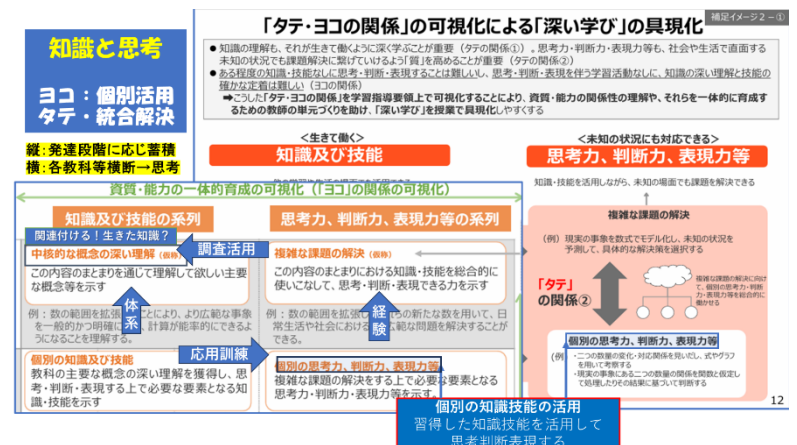


図4 知識と思考 タテとヨコ

教えたいことと、身の回りの身近なものや既に知っていることを結びつけることがタテ、あらたな知識に触れ、持っている知識との関係を自ら考え出すことがヨコではないか？

以上の観点から図 4 において、青地に白字のような表現に変えるべきであると私は考える。タテには個別の既存知識相互を関連する技能によって再整理、一般化した概念を確立、課題解決に当たっては要請に応じてこれを再編成する。これに対してヨコは、知識を活用しながら課題解決を思考、複雑な課題に遭遇して新たな仮説を生み、知識を再構築する。こうした知識と思考のタテの構造は、初期と発展期に分けて、以下の通り整理できないだろうか？

初期：個別知識を活用して課題解決する知識→思考；知識応用

発展期：課題解決のために知識総動員する思考→知識；働きかけ 必要な知識を生み出す；思考力活用

5. 見方・考え方

見方・考え方は資質能力の一部との誤解解消のため、図 5 のように資質・能力（中核的な概念等を含む）を学びの成果に対して、よりよい社会や幸福な人生に繋ぐ学びの意義・本質とする見方・考え方として整理された。

この中では、知識と思考の構造化に触れることなく、一体的に形成された資質能力は教科の深まりの成果として取り扱われている。前回の論点整理後、

答申において、「各教科等の特質に応じた見方・考え方」、「深い学び」と「見方・考え方」の関係の議論が追加され、各教科の見方・考え方の一覧も作成されたが、今回に一定の成果があるが、「各教科等の学びの深まり」を「中核的な概念等」による資質・能力の構造化によって一層具体的に示し、「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核」に焦点化してより端的に示していくと方向性が示されるに至っている。今後中核的な概念、教科の深まりの成果として構造化されて再整理される事に期待したい。

中核的な概念とは何か？ どのような思考によって形成されるのであろうか？ 習得の目指す知識のゴールであり、思考が関わることは明白である。今回の審議経過だけでなく、過去の教科別の WG の審議を見てもその内容は明らかでない。見方・考え方を知識活用の際の視点と考えると、思考に加えられないか？ ①教科の学びの深まりを知識のゴールとし、②本質的な意義の中核を思考のゴールとし、中核的な概念に対して後者を見方・考え方と言い直してもよいのではないだろうか？ 前者を知識の形成、後者を思考の過程と位置付けて構造化できないか？ 知識は教科に留まるが、思考は教科を超える第一歩であり、教科を超えて課題解決を図る探究の起点ではないだろうか？

6. 学ぶとは？ 原点に戻り授業改善へ！

新しい構造が示されたが、学ぶには個別知識の獲得以上に大きな意味があり、これを明確にすることから授業改善へのヒントが得られるのではと考えた。

<Q2. 学ぶとは？>

審議の中において関連した表現を探すと、「各教科等で習得した概念（知識）を活用、身に付けた思考力を発揮、知識を相互に関連付けてより深く理解、情報を精査して考えを形成、問題を見いだして

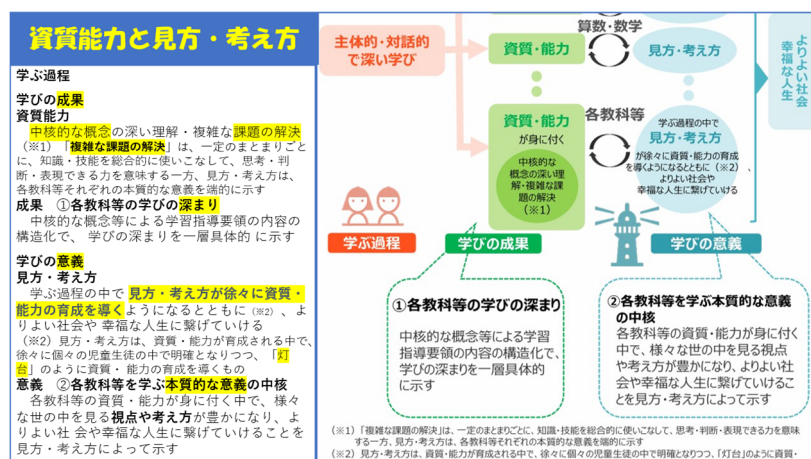


図5 見方・考え方

解決策を考える、思いや考えを基に創造」を見出すことができる。

この他、「身の回りの知っていることと関係づける、状況に応じて自分事として考える」等と考え、**「習得とは接地」**ともいえる。

知識を活用、思考を通して再構築することこそ学びでないだろうか？こうしたベースに立って教科書を編集、教材を作成することで、現場の先生の授業改善を支援できるであろう。習得、活用、探究の学びのプロセスはこれらの原点ともいえる。

7. 新たな理念の全体構造

前回の改定で、何を学ぶ？<どう学ぶ？<何が
できる？を重視、「主体的・対話的で深い学び」で

「資質能力の3要素」を目指す基本理念が打ち出され、今回は「見方・考え方」、「学びに向かう力・人間性」を見直し、評価の変更も提案されている。これらを含め全体を説明するための多くの図が示されているが、全体を図6のように表現することで、課題や論点を位置づけ、理念の全体を概観できる。

また図7のように資質能力の3要素を3次元座標に対応させることで、教科授業の目指す中核的概念、課題解決に向かう見方・考え方、さらには探究やキャリア教育などをベクトル表示することができる。授業改善に繋がる支援内容や方策の位置付けを明確にできる。さらに学びとは知識や事実間の関係に気づき、随時更新することであるとの認識に立ち、生徒の関心と理解を把握した上で、対話による知識更新を考えた授業デザインの重要性を指摘したい。こうした学びの構造の理解と活用こそ、授業改善、ひいては教育理念浸透、イノベーションの実現に連なると考える。

8. まとめ イノベーションと学会の役割

今回の論点整理では、デジタル学習基盤を活用した個別最適で協働する学びが重視されている。また並行して教員養成も議論され、ひとりひとりの生徒を変える先生の授業改善が検討されている。多様性包摂、実現性と並んで、深い学びは最も基本的なテーマであり、知識と思考の構造化に加えて、学会が専門的立場から生徒の学びと先生の授業を改善する支援策を模索したい。

<参考文献>

- 1) 新論点整理 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/mext_00010.html
- 2) 前回告示 https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_03.pdf
- 3) 答申 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf
- 4) 答申案 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（案）（第1部） 2016年8月26日
https://warp.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/08/29/1376580_2_1_1.pdf
- 5) 前回論点整理 資料1 教育課程企画特別部会 論点整理（案）：文部科学省 2015年8月26日
https://warp.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1362063.htm

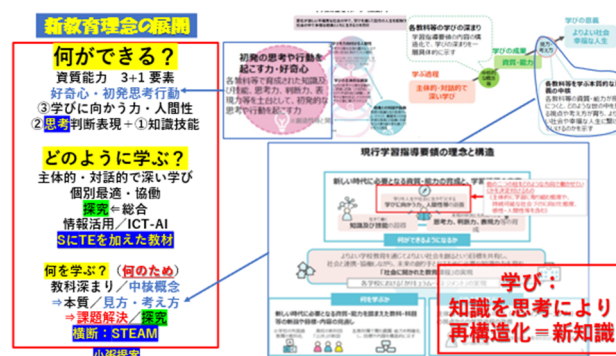


図6 新しい教育理念

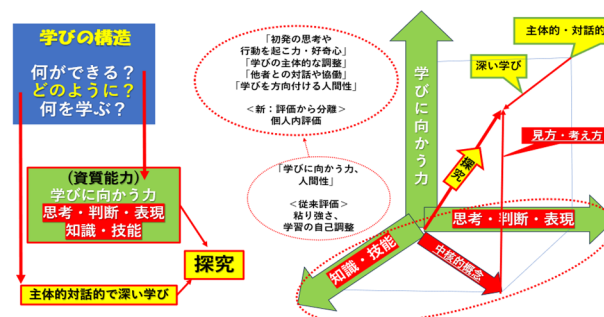


図7 資質能力の3要素の構造化